

平成 24 年(2012 年) 2 月 15 日
山 口 県 病 害 虫 防 除 所

1 病虫害名 ピーマン炭疽病
(病原菌：*Colletotrichum simmondsii* R.G. shivas et Y.P. Tan)

2 作物名 ピーマン

3 特殊報の内容 新発生

4 発生経過

(1) 発生日：平成 23 年 9 月初旬

(2) 発生地域：山口市徳地（露地ピーマン栽培ほ場）

(3) 発生状況

ピーマンの果実に、炭疽病とみられる症状が発生した。9 月中旬の降雨後、従来の炭疽病に比べ病勢の進展が早く、激しい症状を示した。

山口県農林総合技術センターで病原菌を分離し、その分離菌の形態的特徴と DNA 塩基配列を解析した結果、従来のピーマン炭疽病菌（*Colletotrichum capsici* 及び *Glomerella cingulata*）とは異なり、県内では未確認の *Colletotrichum simmondsii* であることが判明した。

本菌によるピーマン炭疽病は、平成 17 年に島根県、平成 21 年に兵庫県、千葉県で発生が確認されている。施設栽培での発生は確認されていない。

5 病徴及び被害の特徴

(1) 病徴

従来のピーマン炭疽病と同様に、果実は、はじめ水浸状の小斑点が生じた後に褐変してへこみ、その後、拡大して同心輪紋を形成する。また、表面には、小黒点（分生子層）を同心円状に密生し、鮭肉色の分生子塊が形成される（図 1）。

葉にも斑点病によく似た同心円状の斑点を生じることがある。

(2) 被害

いったん発病すると、被害が急激に拡大し（図 2）、著しく減収する恐れがある。

6 発生生態

(1) 本病原菌は、被害植物残さとともに主に土壌中で越冬する。降雨やかん水時の土壌の跳ね上がりによりピーマンに菌が付着して感染する。傷口があると感染しやすい。

(2) 感染後は、降雨やかん水により病斑上から分生子（図 3）が飛散し、次々に感染する。

(3) 本病原菌の最適生育温度は、25～27.5℃で、梅雨明け前後から発生が認められ、盛夏期～秋雨時期に多発する傾向がある。

(4) 本病原菌は、ピーマン、トウガラシ類をはじめ、トマト、イチゴ、サヤインゲンに病原性を有し、多犯性と考えられる。

7 防除対策

(1) 耕種的防除法

ア 雨よけ栽培する。

イ 整枝、せん定をこまめに行い、ピーマンが傷つかないように支柱や枝つりなどでしっかり固定する。

ウ 発病果、発病葉は、見つけ次第ほ場外に持ち出し、焼却するかビニールに入れるなど適正に処分する。また、落ち葉も取り除く。

エ 土壌の跳ね上がりが感染につながるため、畝や畝間の土が跳ね上がらないようほ場管理に努める。

(2) 薬剤防除

ア 登録農薬は、TPN水和剤（商品名：ダコニール1000）、アゾキシストロビン・TPN水和剤（商品名：アミスターオプティフロアブル）がある。

イ 特に、前作で発生が認められたほ場では、梅雨時期に予防散布を実施する。



図1 ピーマン果実の病斑



図2 炭疽病がまん延したほ場の株



図3 *Colletotrichum simmondsii* の分生子